

目的 古来からの習慣で、女性は結婚支度に和服を一揃い調製している。結婚支度は母親の責任とされているが、愛知県・岐阜県を中心とした地域では、「衣裳みせ」と称して支度のすべてを公開する風習もみられる。日常生活では和服着用の機会が少なくなった現在であるが、結婚支度は依然として従来の風習がそのまま踏襲されているであろうか。

そこで、当地方に在住する娘を持つ母親の立場では、このような習慣をいかに受けとめているかについて、和服に対する態度と関連させて検討した。

方法 女子短大生の母親々24名を対象とし、昭和59年11月下旬に、留置法により調査を行った。「和服の着用に関するしきたり」、「子女の結婚支度として調製する和服の量」、「衣裳みせの風習」に対する被験者の行動意図および態度、規範意識を井上和子らの形式を用いて測定し、さらに一般的な和服に対する態度をサー斯顿法を用いて測定した。

結果 上記の「しきたり」、「結婚支度」、「衣裳みせ」に対する行動意図を外的基準にとり、それらに対する態度と規範意識を説明変数として重回帰分析を行い、行動意図を規定する説明変数 F （標準偏回帰係数）を算出した。「和服のしきたり」に対する被験者の行動意図は、態度よりもむしろ規範意識の影響を強く受けている。「結婚支度」に対する行動意図は、規範よりも態度の影響が大きく、「衣裳みせ」に対する行動意図では、態度と規範の影響は同じくらい受けていることがわかった。また、一般的な和服に対する態度が好意的な者と非好意的な者では、説明変数の F がどのように異なるかについても検討の結果、和服に対して好意的な者ほど、規範の影響が強く反映されていることがわかった。